96-477

資料 5

日本外交論

序 己 正 石 山 巨 大 務 商 農 前

序 敬 原 巨 大 務 內 前

序 郎 一 修 藤 齋 官 次 務 商 農 前

序 三 義 谷 箱 員 議 院 議 衆

序 郎 太 喜 部 卜 員 議 院 議 衆

大塚善太郎著

東京 相模屋書店 發行

明治
43. 6. 10
內交

序

米國に於ける日本人排斥の聲は、夙に我國民の憤激する所たりと雖も、而かも其の眞の原因及び光景に至ては、實は杳として通ずるあらざる也、時に米國より歸る者、排斥問題を論ずるなきにあらず、恨むらくは其の立言餘りに抽象的にして、終に其の眞相を得ること能はず。

蓋し我日本人の移住するは、獨り米國のみに止まらずして、世界到る處、其の足跡を印せざる莫し、則ち米國に於ける日本人排斥の眞相は、獨り米國のみに限る問題にあらずして、世界到る處日本人移住民問題の參考とならずんばあらず。

大塚則鳴なる人あり、卜部唯我を介して、其の著「日米外交論」の稿を似し、且つ余の序を徵せらる、繙きて之を讀むに、對米策の根本に就き、余等を警醒せるもの尠からず。

夫れ獨逸人は能く冥想す、故に其の哲學は幽玄也、英人は能く觀察す、

故に其の哲學は不易也、不易なるもの、却て幽玄なるものより尊としとは自から識者の定論。哲學すら且つ然り、況んや外交の論に於てをや、余此著に於て特に觀察の徹底して而して深刻なるを推稱す。之を序と爲す。

明治四十三年五月　　大石正己

序

今や外交は避けんと欲するも避くべからず、家康の鎖國主義も、ワシントンの超然主義も、現代列國の大勢に於て行ふ能はざるを奈何せん。

但た往年の外交か、專門家の獨斷に任するの風ありしに反し、憲政と外交との關係は、近時の外交をして漸く國民的ならしむるに至れり。

我日本國民は、曾て日清戰爭に於て外交と沒交渉なり、日露戰爭に於ては唯だ怒號するを知て而して考慮するを知らず、今後對歐關係、對米關係に就きて其れ果して如何なる可きか。

「日米外交論」の著者、余か知友粕谷代議士を介して序を求む、余本書の對米關係に於ける國民の覺悟に資するもの少からざるを信し、聊か數言を卷首に題す。

明治四十三年五月　　原　敬　識す

序

友人大塚則鳴、其の著「日米外交論」を似して余の序を乞ふ、余之を繙きて讀むこと一過、其の特色を數へて三箇を得たり、國民外交上の智識に向て裨益すること其の一也、世固より外交專門の著書、雜誌等之れなきにあらず、然れとも概ね過去の歴史を談し、若くは外人の論説、報導を譯述するに止まり、或る特別の問題を捕へて縱横に之を論破したるものあらず、日米關係の如き殊に然りと爲す、本書は此點に於て甚た多とするものありと思惟す。

操觚者が動もすれは慷慨激越の調を成して國民を誤まるの弊を矯めんとする其の二也、則鳴由來熱血に富む、其の平和主義を提唱するや甚た奇と謂はさるを得す、左れと所謂對外硬なるもの實は蒼辨慶に過きすと爲すにある耶、果して然らば則鳴亦た國家經綸の術を解する者と謂ふ可し。

國民自負心の昂進を抑制せんとしたる其の三也、此の點に於て余は切に則鳴に勸告す、書中往々にして我國民の實力を認めざる節あり、是れ我國民に對する侮辱とはならざるか、敢て著者の再考を待たざるを得す。

茲に之を記して序に代ゆるのみ。

明治四十三年五月　　柏谷義三

序

則鳴大塚君嘗て余が家に客たりし事あり、法律を學ふこと數年、成らす、藏書數百卷を賣り、平然として曰く、「我が性法律家に適せすして新聞記者に適す、是れより身を新聞界に投せん」と、余乃ち新聞記者の生活難を說き、且つ社會の之を待遇する甚た厚からす、決して就く可きの業に非さるを諭す、則鳴聽かすして曰く、「法律家も新聞記者も、職業たるに於て異なるなし、僕一たひ職業を擇ふ、社會の待遇報酬の多寡を顧みるの要なし、已むことなくんは、娶らす、貧らす、循々然として天職に殉するあらんのみ」と、幾はくもなくして米國に去る。

烏兎匆々、互に音信を通せすして早く既に八年を過く、客冬則鳴飄然余が門を叩く、手に一物の携ふるなく、唯た淫せす、屈せす、耻ちす、沮ます慍らさるの風あるのみ、口を開けば則ち當代の名士を罵倒し、キリスト教を笑殺し、道德を輕視し、然かも勤儉貯蓄を說き、惡衣惡食に甘んじ、人

格を重んし、新聞記者としての使命を論すること、依然たる舊時の蠻骨也、余之を見て奇なりと爲す。

既にして今春米國々務卿ノックス氏の滿洲鐵道に關する提議なるもの、世に公けにせらるゝや、東京諸新聞紙、殆んと筆調を一にして之を論破す、余一日則鳴に問ふに、若し足下にして外務大臣たらはノックス氏に對して當さに如何の答を爲すへきかを以てす、則鳴破顏微笑して曰く「……の限りに於て大に之を贊成すと答ふ可きのみ、敢て拒絶の方面より立言して答ふるを許さす」と、余之を聞て意外に其のハイカラ的なるに驚けり。

嗚呼則鳴は、その外を蠻骨にして而して其の内をハイカラにせるもの乎、新聞記者として立つ、怎たらすして獨然一家を成さん也。

頃者著はす所「日米外交論」一編、固より楮餘の一筆、未た其の血性を灑きたるの大文字と爲すに足らす、余は唯た其の歸朝後の處女作に接し、喜んて之れか序を爲すと云爾。

明治四十三年五月上浣　　卜部喜太郎識す

序

エッチ・アデングトン・ブルースなる記者は、米國紐育市に於て刊行する週刊雑誌『アウトルック』誌上に於て、曩きに不覺にも米國の侵略的野心の歴史を、露骨に且つ忌憚なく章を重ぬる數回に掲載せり、其の論旨を以て輕々一雑誌の一論説、一記事と見る徒は、是れ即ち吾輩以上の仙人たらんのみ、苟くも現代の日本國民たる者、此の一篇を讀みて、且つ西米戰爭以後の米國の列國的活動、帝國主義の發揮、さてはルーズヴェルト式人氣の勃興に鑑みば、坐ろに戰慄せざる者はあらざるべし。

可見矣、滿洲鐵道中立案は提議せらる、日本人排斥案は下院の委員會を通過す、而かも我が同胞十萬の生靈はロッキー山以西に於ける米國の農産業を支配しつゝあるにあらずや、小村外相と大石正己の問答の如きは、未だ以て對米策、對米出稼き案の眞理を極めたるものにあらざる事、桑港街頭を逍遙する十歳の鼻たらしの日本小僧にても、善く之を

斷言し得可し。

論議稍々岐路に入りたりと言ふ乎、否な、不然矣、我國の外交、由來米國を眼中に置かざりき、是れ對米策の振はさる所以也。換言せは我國一般の人士はペルリー提督來航の眞相を了解せすして、漫に長浦の石碑を拜し、徒らに日米兩國歴史的和親なるものを謠ひて、依て以て日米兩國間の權衡利害を保持せんとす、嗚呼、此に至て對米外交なし。

蓋し北米合衆國の狀態たる、一種獨特の政治、社會組織、人情、人氣を有し、外交の如きも沒主義的にして、錯雜纏綿せる事情の下に、俄然突然、飛躍的行動作意の現はるゝは、不思議と云ふも愚か也。然るに從來我國一般の人士は、歐洲列國の秩序整然、一心不亂と云ふ組織と同樣に考へ、一概に泰西列國と云ふ觀念によりて其の頭腦を支配せられたる結果全く米國觀を誤まり、隨て對米政策を失ふに至れり。是れ小村一人の罪にあらず、吾國民一般か海外の事情に通曉するか如くにして、未た精

密に通曉せさる爲めなりと斷言するに憚らす。

詞友大塚則鳴國士を以て自ら任す、其文章、人物、誠に天下に雄飛するに足る、頃日「日米外交論」を著はして序を需む、乃ち舊稿の一節を錄して之を與ふ。

明治四十有三、夏五月

麻布笄町の僑居に於て

談笑　齋藤　修

（齋藤先生此の序を送り來りしは五月一日と記す、越へて六日、先生急性肺炎の爲めに寶を易ふ、嗚呼悲い哉……著者附記）

日米外交論目次

緒論……一

治に居て亂を忘れず。近世四大戰爭。政府の外交秘密主義。國民外交上の智識。國民奢侈贅澤の弊。軍國時代を過ぎて外交時代に入れり。

第一章　日本の國勢……八

第一節　極東に於ける日本國民の天職……八

日本の地勢と歐米物質的文明の潮流。日本と平時局外中立國。明治外交史の第一期。同じく第二期。同じく第三期。ツエーツリーテーと日露講和條約。伊藤公と刺客安重根。極東安危の繫かる所。

第二節　歐米外交の新時代……一六

第十九世紀末尾の外交——三角同盟、露佛同盟、日英同盟。英佛露の協商。獨逸の不安。米獨の接近。日本の覺悟——英國との現狀、露西亞との關係。日露地勢上の關係。滿韓交換論。今後の外交問題は對米國に在り。

第三節　黄禍論と近時の外交……三五

日清日露の戰爭と白人の惡情。日米戰爭論の發端。黄禍論と白禍論。黄禍論の效力。米國と黄禍論。小人の心を以て君子の腹を推す。

第二章　米國外交の過去及現在……三九

第一節　米國外交の三遷……三九

米國外交の始末。百五十年間外交上の經驗。所謂三遷の跡——第一期、ワシントンも痛罵酷擊を受く、所謂自由船舶自由貨物の主義唱かれず、ジェー大使の屈節。第二期、神聖同盟と英國、モンロー主義の三大綱領。第三期、四米戰爭の理由、四班牙艦隊の行動推奨に鉦ひす、山を隔てゝ廻を見攝を隔てゝ角を見る、帝國主義にあらずとの辯護、布哇合併の由來、モンロー主義と布哇合併。

第二節　米國領土擴張史……四七

千九百年に於ける米國の領土。ルイジアナの買受け、ナポレオン第一世とネレーラン。メキシコ戰爭とニウメキシコ及加州。米國領土擴張の跡——(一)國民の獨立心(二)外交家の大膽不敵(三)四漸の極まる所は東也。果然極東に於ける米國の野心。

第三節　東亞に於ける米國の勢力……五七

米國從來の超然主義、米國は世界のポリズマン也。ダフト内閣の變調。一業務ちて天下の秋を知る。諸國中立の提議と雜誌アウトルックの所說。提議の不條理なる要點。所謂輪愛嚴滋問題。米國政府の眞意。牡丹花下の猫其心蝴蝶にあり。

第三章　日米衝突の焦點……四四

第一節　總論……四四

刻下日米間の三問題、滿韓問題は戰爭とならず。關稅問題は談判に上らず。條約期限問題も重要ならず。第一條但書の問題。日米間移民禁止協約の有無。外人土地所有權問題。外人土地所有權の事は通商航海條約の圏外にあらずや。虛名を捨て實權を攝る可し。在米日本人の動。在米日本人故國に貢獻する所。在米移民今後の增減如何。移民問題と國の體面。

第二節　日本人排斥問題……五二

排斥論の現在及將來。排斥論に對する理屈攻め。支那人排斥の由來。理屈攻めは其の眞頂也。日本人排斥の歷史——日韓人排斥同盟會。クロニクル新聞の排斥論。學童問題と布哇移民轉航禁止。レストランド惡戲事件。土地所有禁止案。日本人排斥の三大原因——第一、風俗問題。淫賣婦は國辱也。ヤンプラー。日本人料理屋問題。金看板と怪しげなる行燈。第二、貿易問題。第三、政治問題。日本人は外交を好む。國民性。學童問題と布哇移民轉航禁止とは交換問題にあらず。日本人の實力を買被られたる原因。英領加奈太の日本人排斥。國民外

交の祕訣。白人間の信用。歸化權獲得論。右に對する評論。歸化の種類。征服的歸化。實際的歸化。間諜的歸化。裏向きの國際談判。エソップ物語中の鳳。

第三節　在米日本人移民策……三五

無形なる國土の延長。我國學者の移民論。移民と植民の別。政治家の移民に關する智識。職會隨一の外交通。移民策の三義。第一、移民外交策——米國太平洋艦隊の寄航。外交官に人材乏しき所以。對外硬論往々天下の大事を誤まる。外交は忍也。外交は忍也。第二、對移民策——移民に對する誤辭誤官。小村子の言。對外意思表示の呼吸。第三、純正移民策——土著的移民と出稼ぎ移民。歸化同化する移民と否らざる移民。日本人移民の特色。本論(一)移民社會の組織。愛國心と獨立心。同胞間協同一致を缺く。移民地邦字新聞の弊。日本人會の不必要。著作放蕩の弊。淺薄なる成功論と無分別なる擴張論。移民地に於ける無政府主義者問題。(二)對本國の方針。(三)對白人の方針。移民の地位。賓客說。人質說。居候說。譬しむ可きは居候根性にあり。國際的居候の禮式。德川家康忍の一字。桑港日本人靴工同盟會。米國化の論。

第四章　日米戰爭の風說……一五九

米國內部の日米戰爭論。海軍擴張熱。ルーズヴエルトの海軍擴張案。新海軍綱マイヤー。十四吋砲搭付の軍艦。我國經濟上の實力。米國は貿易上の大事客。移民の送金額。日米海軍力の比較。清國と露西亞。日英同盟の效力。

第五章　餘論……一七〇

國民と國民との外交。不治の治、無策の策。將我慢と泣寢入り。米は大國也。古羅馬帝國の滅亡。和魂米才。人間に七生して相爭はん。

終

明治四十三年五月二十六日印刷
明治四十三年五月二十[illegible]日發行

（定價金五十五錢）

埼玉縣越ヶ谷町二百九十七番地
著作兼發行者　大塚善太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

東京市本郷區眞砂町十五番地
發行所　相模屋書店

東京市本郷元富士町三番地
大賣捌所　齋藤書店

米國桑港ゲリー街
同　青木大成堂
1601 Geary St. San Francisco Cal., U. S. A.

不許複製